

◆ かつぱ民話シリーズ⑧ ◆

相模の河童村 三流

さがみのかつぱむら さんりゅう



作:近藤せいけん



各地から集まった河童族のお祭り、「相模のかっぱ祭り」は三日三晩つづいた。宴もやっと終わりに近づいた。

遠野のかっぱ族、筑前若松のかっぱ族、島根の日野川のかっぱ族、五島列島の河童族（ガータロー）、の中から、この相模の「さんりゅう」に残りたいと、数十家族が名乗りでた。太郎河童は心から喜んだ。

「ええ、本当！夢見ているようだ！」 「各河童族の皆様衆、！よろしいかあ〜」

各河童族とも「おのおのの河童が残りたいという名ならば、自由だ」

「太郎河童どんにおまかせいたそう」 「太郎どん、残ったかっぱ族まとめて、どうか、よい村をおつくりなさい」

「ありがとうございます！ ありがとうございます！」

太郎河童は何度も、何度も、こうべを下げた。

さくらの宴も終了した。

翌朝、各河童族の旅だちのときを向かえた。笛がながれ、旅だちの太鼓がどこかもの悲しそうにながれ、各船団に帆が張られ、一そう、また一そう帰途についた。

三流に残った村河童が見送る。

河童族の挨拶である、「両手をあげ、大きく左右にゆつくり振る」

つぎ、つぎ、とかっぱ船は相模の国の相模川、「かっぱの村、三流」を出こうしていった。

いつまでも、いつまでも、三流の住河童は手を振りつづけた。

かっぱ村の村づくりが始まった。

太郎河童が村長に選ばれた。百かっぱをこえるかっぱ数になった。村の取り決めごとが話しあわれ、村のかっぱ村の掟（おきて）が作られた。

「我々、河童族は子々孫々に渡るまで生き残り、繁栄しなければならない。」

「人間界と和し共に共栄共存をしなければならない。」

「河童族の団結をはかり、お互いに助け合い、仲良く、河童族の誇りをもって生きること」

「物は分けあい、奪いあわないこと」

また各かっぱの役割が決められた。

魚の漁にいくかっぱは、川魚班、海魚班に分かれ担当が決められた。野菜づくり、米づくり、お酒づくり、大工、お天気予報、踊り、宴会、それぞれの担当が決まり・活躍が始まった。

相模の太郎河童の永年の夢が、実現した。

相模のかっぱ村「三流」、人間界には見えない、かっぱ村である。

(終わり)